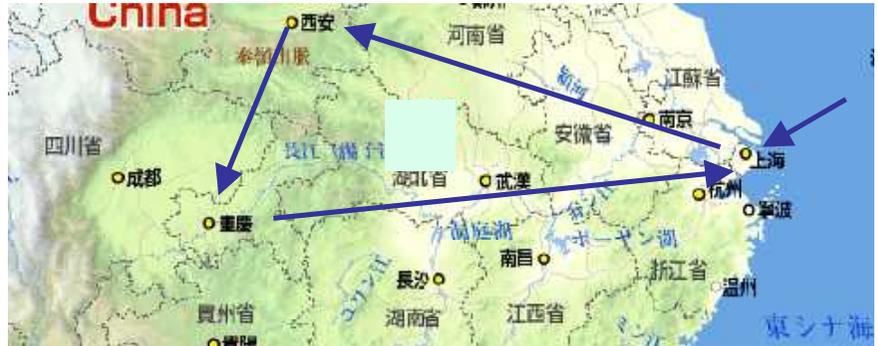


# 山本正志の西安・重慶旅行記

日中友好経済懇話会経済視察団(2010年3月22~27日)

## 3月22日

中国東方航空で午前10時関西空港離陸  
上海 西安には午後5時30分前(現地時間)到着。今回おなじみの顔ぶれと



もに新顔も数人いて総勢20人で大西広先生は現地参加。夕方の西安市内は大変な交通渋滞で、ホテル「唐華賓館」にはいると早速西安交通大学関係者との交流会に入る。の王精誠教授(経済学)が「最近の西安を中心とする陝西省の経済発展の状況」について「西安地域は北京、上海につぐ経済規模を持つ将来性にある地域です」と具体的数字を挙げて熱弁をふるわれた。

王精誠教授のお話では、陝西省の産業はエネルギーと化学工業中心で航空・宇宙をはじめ軍関係の産業も多く、地下資源でもレアメタルが豊富で、今後天然ガス液化、石炭液化、石油事業をの基盤強化に取り組むという。一方、ここ30年で「富める者はますます豊かに、貧しい者はますます貧しくなっていく」「環境と不公平の解決は急務です」と問題点も指摘された。この席には西安長島精工の長島副社長も参加、あすは長島精工にも行く予定になっている。

### 王精誠西安交通大学経済学部教授のお話(通訳は小林さん)

陝西省の産業はエネルギーと化学工業によってGDPは大きく発展し、09年現在8230億人民元(約11兆円:日本のGDPは約500兆円)。航空・宇宙をはじめ軍関係の産業も多くあり、地下資源でもレアメタルが豊富で期待されている。今後5年間で天然ガス液化、石炭液化、石油事業を発展させて基盤を強化し、さらに、炭鉱、石油精製、レアメタル生産技術の近代化、ソフトウェアの強化、地下鉄など交通網の整備や下水の普及などアンバランスの是正とともに、新たに2020年までに800万㎡に1000万人が住む産業都市形成を計画している。王教授は、「ここ30年で富める者はますます豊かに、貧しい者はますます貧しくなっていく。格差問題の解決には中央政府も特に力点をおいている。環境と不公平解決は急務である」と強調された。私は「めざましい発展の状況をお聞きしましたが、今後の展望で水と電気の供給は大丈夫ですか」と質問した。王教授の答は:「南水北調」(長江の水を北部に導く)事業で長期的には解決のめどを持っている。漢江(長

江の支流)が陝西省南部を流れているが、この水を省北部に引く。電力については長江の水資源は豊富であり上流、中流、下流の中で中流の計画が陝西省の地域で計画されている。その他火力発電所の計画もあり、電力の問題は解決される。――

西安交通大学



西安は京都市と姉妹都市。私は1966年9月、京都市会議員の時に「世界歴史都市会議」参加代表団の一員として西安を訪問した。

この時の世界歴史都市会議開会式には、銭其深外務大臣・副総理も出席し「西安を近代的高新技術産業都市に」との意気込みが感じられた。市長主催の歓迎式典では城門で当時(唐)の武装衛兵に扮した大部隊の歓迎行進や夜には城壁上に各国代表団の席が設けられ市をあげての「花火大会」が挙行された。城壁は高さ14m、周囲は14kmで城壁の上でマラソン大会が開かれるという。世界歴史都市会議の合い間を利用して敦煌莫高窟、鳴沙山にも足をのばした。西安滞在中に唐歌舞観賞、秦の始皇帝の兵馬俑博物館、陝西歴史博物館、碑林公園視察などもあり充実した旅行だった。

当時の回想から：各国代表団は商業施設(百貨店)に案内された。午後2時、入り口についた一行が驚いたのは、一般の買い物客をすべて追い出してしまったこと。

一般市民のいなくなった売り場で、電機製品の値段と機能を尋ねようとそこにいた女性店員に「How Much?」と質問したとたん「キャー」といって走り去っていった。やがて戻ってきたが、どうやら通訳をつれてきたということらしい。



## 23日

午前中は西安交通大学日本語学科の先生方と学生たちとの交流。西安交通大学は19学部と3つの付属病院を有し、学生数約3万人(うち大学院生1万2千人)、専任教職員数は5600人。懇談に参加してくださったのは日本語学科の先生方と数人の学生たち。

まず橋本団長から贈り物が手渡され、通訳をつとめ務めていただいた小林さんからも本などが贈られた。その後あらかじめ小林さんから出されていた質問事項について説明があった。日本語学科は定員20人、まだまだ機材(プロジェクターなど)や資料が不十分(書

籍：まだ 1000 冊に満たない) というのであった。

しかし日本語学科の学生たちの頑張りはあるものの(日本語コンテストでの入賞)たとえば日本の新聞が1部も入ってきていないこと、インターネットでの日本語のサイトへの接続が不十分なことなど教育環境の面では十分とはいえない状況という。



阿倍仲麻呂記念碑

西安交通大学の門をでた向かい側の興慶公園(興慶宮跡)には、717年に遣唐使として長安に渡り、玄宗皇帝に仕え、帰国の夢を果たすことなく亡くなった阿倍仲麻呂の記念碑が建っている。午後は西安ダイキンを訪問、1996年8月製造販売子会社として「西安大金慶安圧縮機有限公司」が慶安集団との合併で設立された。その後西安にコンプレッサー製造工場を新設、専用空調コンプレッサーの製造を中国にシフト、西安工場の製品は中国市場のニーズを満たすほか、日本にも輸出されている。

続いて西安長島精工を訪問、1月に城陽市の長島精工本社の見学会に参加して社長の長島善之氏の説明を聞いたが、金属表面を精密研磨(「きさげ」右下写真)して平面2軸(前後軸・左右軸)摺動面の誤差は $\pm 0.001\text{mm}$ 以内という超精密平面加工を実現している。この精度はやはり手作りでないという。

夜はレストランシアター唐楽宮でディナーショー。ショーは唐王朝時代の再現の舞台がくりひろげられる。プログラムを見ると「晋代の民間舞踊で月に戯れる天女」「玄宗皇帝と楊貴妃」などとあった。ディナーショーを終えてホテルに帰ったが、すぐ隣の大雁塔がライトアップされていたのででかけたが正門が閉まっていた中には入れず。



バスの中で、現地ガイドさんによると「私の会社のガイドは200人ですが英語のガイドは120人、日本語のガイドは以前は60人いたが今は20人になってしまった」という話。

## 24日

午前中は大雁塔（大慈恩寺）、西安博物館など見学。田舎のレストランで昼食、兵馬傭博物館は1996年に見ているので新しい展示はあまりなかった。（写真右）



その後、華清池へ。楊貴妃と玄宗皇帝の保養地として有名だが、近代中国史上でも、蒋介石が張学良に補足されて「国共合作」が成立した現場でもあり、また周恩来が執務した部屋もある歴史的な場所でもある。

### 西安事件：

楊虎城率いる西北軍と張学良率いる東北軍による共産党討伐が進まないことに業を煮やした蒋介石は、1936年12月、この二人の将軍に檄を飛ばすため西安に来た。その時蒋介石は華清宮に泊まっていた。しかし、張学良は共産軍との内戦停止と一致抗日の方向こそ救国の道と考えて、抗日運動を抑圧し対共作戦にだけ夢中にな



蒋介石、周恩来などの執務室となった華清宮

っていた蒋介石に対し、12月12日朝5時反乱を起こした。突然の銃声で目を覚ました蒋介石は着の身着のまま逃走したが、山腹の岩陰に隠れているところを張学良の護衛兵に捕らえ、西安市の西京招待所に幽閉された。この情報は張学良によって延安にいる毛沢東に伝えられると、毛沢東は周恩来を西安に派遣し、蒋介石と交渉を重ねた。その結果「抗日民族統一戦線」結成となって、国共合作が実現した。それは日華事変が始まる半年前の出来事であった。

華清池を後にして西安空港へ移動、重慶へむけて出発、1時間半で重慶空港着。ホテルには午後10時過ぎに入る。ビールを買いにでると瓶ビール2本で7元（約100円）

## 25日

午前中は西安フォードマツダを訪問、生産現場を見せていただく。ここではエンジンや部品などを国内各地から調達し完成車を組み立てているが作業工程をみていると何となくゆっくりしている。マツダのデミオ（日本名）は価格も手頃で人気が高いという。再び市内中心部にもどって少し早い昼食、午後は日本総領事館訪問。日本領事館はビルの最上階の37階。瀬野清水総領事から重慶の産業・経済の状況についてくわしい説明を頂いた。領事は外務省に入ってから1976年以来通算で23年、北京・広州・上海などの

公館をへて重慶にこられた「中国通」である。「中国は先進国と途上国が同居していて、農村部にすんでいる2千数百万人は非常に貧しく、ますます貧富の格差が広がっている。」という。

その後、物流企業である重慶長安民生物流有限公司を訪問、重慶埠頭の整備や物流の現況などについてお聞きする。

三統の岩浅社長と大阪市港湾局にお勤めだ

った山崎さんは海運の専門家、質問に対する説明によると三峡ダム（シップ・ロック）ができたことで6000t級の大型コンテナ船が上海から重慶間2500kmで運行可能となったが、湯水期に重慶～武漢の間は水深が浅くなるので積荷を軽くするという。下りは5日、昇りは8日程度の日程ということで積荷は車が主で毎週3～4便の運行とのことだった。説明では「船隊を組んで1万tが可能」であり「1万t級の船が運航可能」ということではなかった。

その後積み出し埠頭構内に入って大型クレーンでのコンテナ積み込み作業現場（写真上）を見せていただいたが、水量が少ないということもあってか、コンテナ輸送船は20mほど眼下に、これでは相当に時間もかかるし正確さが要求されるコンテナの積重ねも遠隔操作のようになり大変だと思った。重慶・上海間のコンテナ輸送単価で見ると、航空機を使うと2万元、道路輸送で5000元、船で2500元という。

終わって今夜の夕食は「火鍋」料理、思ったほどピリ辛いでもなかった。お嬢さんがテーブルに配置され料理の説明や采配をしてくれるが、聞けば大学生でアルバイト、色々のお土産をテーブルに並べて「お土産にいかがですか」と勧める。



おそろしく長い車両運搬車。荷台に上下2列で20数台積載、というのも見かけた。



## 26日

この日は有名な大足（だいそく）石仏の観光、敦煌ほどではないが山肌に掘られた巨大な石仏や浄土と地獄を浮き彫りにした愉快な大彫刻はほほえましい。

大足石刻は中国、重慶市大足県にある仏教石窟。1999年にユネスコの世界遺産に登録された。9世紀から13世紀頃までの大乘仏



教の石仏が岩の壁に彫刻されている。ほとんどが仏教に関する石仏であるが、道教の神々の像も彫刻されている。この中で、広大宝楼閣・華嚴三聖像・千手観音像・釈迦涅槃聖跡図・孔雀明王経变・父母恩重経变像・地獄变図・十大明王像などが有名。649年に最初に切り開かれ、唐代末期、五代、宋代に次々と作られ、明清時代（14～19世紀）まで、石刻の数は増加を続け、最終的には、5万台の巨大な規模になった。



市内に帰り夕食の前に磁器口小路（右の写真）に立ち寄った。みやげ物の店が狭い路地の両側にならび、観光客も多く、まるで五条坂のようなにぎわいだ。磁器口は明、清時代から残された石畳の路地に小さな茶館、飲食店、お土産屋さんが軒を連ねる小さな「老街」である。



最後の夕食では自己紹介など交流会となったが、大西先生は「来年の旅行は新きょうウイグル自治区の各地を訪問する予定」と発表。

## 27日



今日は帰国。重慶出発までの時間に重慶博物館に立ち寄る。博物館のエントランスでは大きな看板が設置されていて、制服を着た公務員（軍人？）が多数群がっている。その横には花束を持ったお嬢さんたちが10人以上も整列してまっている。展示品は発掘された土器や歴代使用されてきた磁器、民芸

品などとともに「抗日民族統一戦線の政治舞台」「抗日戦争の大勝利に沸く重慶」「重慶大爆撃」の展示コーナーもある。「重慶大隊道惨案」という洞窟の再現展示（左上の写真）があり、一番奥には鉄の扉を開けて逃げようとして犠牲になった当時の惨状が再現されていた。現在の重慶は日中戦争当時の軍事都市としての面影はない。博物館前の広場では太極拳・剣舞や子どもたちがスケートボードで遊んでいた。

## 重慶大爆撃

重慶はもともと軍事都市、日中戦争の最中、中国の国民党政権の臨時首都となっていた重慶市にたいして、日本軍は無差別爆撃をくり返した。そのため、川の土手から山の手にかけて防空壕が無数に掘られているという。『重慶抗戦紀事』によると、爆撃は 1938 年 2 月～43 年 8 月にかけて 218 回、被害は死傷者 2 万 6 千人、焼失家屋 1 万 7 千戸。ほかに 41 年 6 月 5 日、防空壕で数千人から 1 万人以上が窒息死したといわれる。――

向かいには巨大な重慶人民大会堂（右写真）  
今日は土曜日なので結婚式をあげたカップル  
が花で飾ったBMWやベンツでおしよせ記念  
写真をとっている。

やがて空港へ、上海経由で帰国の途につく。  
大西先生はこちらの大学で講義があるとかで  
お別れ、同室だった小林さんは在住の北京へ、  
中島弁護士は別便で大連へ。



## <私の問題意識：現代中国の課題>

### 不動産バブルの心配と都市計画

重慶ではいたるところマンション建設ラッシュ  
だった（重慶だけではないが他都市と比較して  
も重慶は規模が違う）。北京・上海・天津となら  
ぶ直轄市である重慶市の共産党書記の薄熙来氏  
は中国共産党の 25 人の政治局員の一員で「重慶  
を内陸部の香港に」という方針で大開発を推し  
進めてきた人物。その方針のとおり、所狭しと  
40～50 階建ての超高層マンションの建設が進め  
られている。「中国の高層ビル都市別ランキング」によると、「100 メートル以上の高層  
ビルが多い都市は、1.重慶、2. 広州、3. 上海、4. 北京」という順位。将来計画では  
450m90 階建ての超高層ビルも建てるという恐ろしい話。日本でも数十年前に「〇〇ニュー  
ータウン」として建設された街がいまや「スーパー・オールドタウン」と化しているが、  
こうした広場も駐車場すら確保できていないマンション群があと 40～50 年経過したら  
どうになってしまうのだろうか。――



### 富める者はますます豊かに、貧しい者はますます貧しく

西安交通大学の王精誠教授も瀬野総領事も中国の経済発展の中で生じている格差の問題  
を指摘されていた。以下 2010 年 3 月 11 日 の西日本新聞から（一部省略）：

全人代（国会）で、温家宝首相は政府活動報告で「経済発展で富を増やすだけでなく、

富という『パイ』を上手に分けるべきだ」と演説した。全人代では、労働組合の代表が「国有企業の幹部と一般社員の収入格差は、2006年の8倍から09年に19倍に拡大した」と報告。広東省の代表は「国有企業は09年に1兆元（約13兆円）の利益を確保した。法人税率を20%から90%に引き上げよ」と提案した。また「所得税の課税最低額を2千元から5千元に引き上げろ」「中国でも相続税や贈与税を導入すべきだ」など、貧困層の負担軽減と富裕層の課税強化を求める声が多い。温首相は、全国で4兆4千億元（約57兆円）あるとみられる高所得者の「灰色収入」（当局に申告していない副収入）への対策の必要性も初めて報告に盛り込み、官僚の財産申告制度を「断固実行する」とも述べた。しかし、「高級官僚の子弟が出世している政府が、本気で改革に取り組むとは思えない」など、早くも冷めた見方が庶民には出ている。

### 深刻な環境問題に取り組む中国の兆戦

「地球白書」の著者レスター・R・ブラウンは2003年6月のレポート「前進する砂漠との戦いに敗れつつある中国」で「（中国西部の）過放牧はほとんど減少していない。勝利は容易ではない」ときびしい現実を指摘していたが、2007年11月7日、中国国家林業局の緑化プロジェクトの進捗状況について発表によると、近年、緑化面積は急速に拡大しつつあり、沙漠化面積が縮小に向かいつつあることが明らかになった。5年間で2885万haの植樹が行われ、その前の5年間と比べ植樹面積は20%近く増加し、中国の人工林面積は5300万haに達し世界最大となった。特に沙漠化が深刻な西部地区で緑化プロジェクトが大々的に進められている。以前は年34万haのペースで沙漠化が進行していたが、現在では年13万haずつ沙漠は縮小し始めているという。

**インターネット・中国情報：** 私は「日経ビジネス ONLINE」をインターネットで読んでいるが、そのコラム記事のなかで「中国事情レポート」の連載があり、これが統計資料なども多くなかなか情報源として役に立つ。というのも中国滞在の記者や駐在社員が現場からの報告を書いているのでリアルタイムの記事として臨場感がある。

2006年4月から続いている北村豊の「中国・キタムラリポート」にはきわどい内容のレポート記事もある。たとえば：「え！中国では下水溝から食用油が作られる？」（2006年12月15日）、「米国なら99%不合格？〔博士5万人〕の粗製乱造ぶり」（2009年8月7日）など。

2007年12月からの「環境問題のデパート・中国の素顔（小柳秀明）」も現代中国の環境問題をレポートしている連載である。

2007年7月から09年7月まで連載の「中国辺境」も雲南省、ウルムチ、ロシア国境黒竜江省、ベトナム国境西チワン自治区などを取材している。

いよいよ5月から上海万博が始まる、私もぜひ行ってみたいと思っている。

